

研修機関	医療法人社団仁智会 金沢南ケアセンター
研修期間	平成18年10月1日～10月31日
所属・氏名	県立金沢伏見高等学校 佐藤 昌宏

I 研修目的

- ・ 老人介護を通じ、介護施設・介護士等の重要性と、その様々な障害を知り、その活動の創意工夫を学ぶ。
- ・ 老人介護施設での業務や多くの人々のかかわりの中で、自身の資質向上を図ると共に、社会人としての自分の役割を考える機会とする。
- ・ 学校現場を離れ、様々の事を体験することにより、今後の教育観・指導観を考える。

II 研修内容

認知症棟において以下の活動を行う。

①介護全般

- ア 食事介助 湯茶準備・配布・飲水介助、エプロン・お手拭等準備、食事配膳・下膳、食事介助、服薬補助、口腔ケア、コップ等洗浄
- イ 入浴介助 衣服の準備、誘導、衣服着脱介助、清拭介助、入浴介助、整髪介助
- ウ 排泄介助 誘導、排泄介助、おむつ交換
- エ 移動介助 ベッドから車椅子（車椅子からベッド）への移乗

②レクリエーションを通じた運動機能維持活動支援等

レクリエーションの計画立案と運営、話し相手

③施設の衛生管理と、利用者の健康・安全管理

洗濯物のたたみと仕分け、下用おしぼりの洗濯と準備、利用者の居室の清掃、ポータブルトイレの清掃、休憩室・ロビー・トイレ等の清掃と消毒、見守り

III 研修成果

《1》 一人ひとりに合わせたサービス提供のために継続・共有される情報と対応

金沢南ケアセンターは介護を必要とされる方々に様々な形（デイサービス・居宅療養・訪問介護・施設サービスなど）でサービスを提供している。

私が一ヶ月間研修をさせて頂いた4階フロアには認知症の約三十数名の利用者の方々が生活をし、15名程のスタッフでシフトを組み24時間体制でサービスを提供していた。

利用者の介助の必要性は様々である。殆ど手のかからない人から、自分ではまったく食事すらできない人までいる。この様に多様な利用者のニーズや健康状態を全スタッフが把握するため、細部にわたる記録が行われていた。体温・血圧・脈拍・排泄の様子、水分と食事の摂取量・服薬・数日間の行動等がカルテと一覧表に記載され、常に一人ひとりに気配り、目配りがされていた。

勤務体制が様々であるため、その場にはいない職員にも情報がきちんと伝わるよう、様々な工夫がなされ、皆が同じ情報を共有することで、施設全体としての姿勢が徹底し、利用者の方々に対して同じ意識での対応がなされていた。このような姿勢を見て情報の共有の重要性を痛感した。

また、利用者の方々一人ひとりが、できるだけ快適に過ごせるような創意工夫を、全てのスタッフが常に考えている姿勢には、感心させられた。その姿勢の中には、利用者全体を考える視点と、利用者一人ひとりを見る視点とが共存して創意工夫がなされていた。

《2》 職員と利用者との関わりで得たもの

4階フロアの利用者の方々は、介護度の高い方が大半である。しかし、スタッフ

の方々の様子を見ると、いつも笑顔で優しく、元気よく接しておられる。また、どの利用者のことを私が尋ねても現在の様子はもちろんのこと、昔の仕事のことや家族のこと、認知症を患う以前のことまで詳しく答えてくださった。それはまるで自分の親や肉親の話をするかのように優しく、誠意に満ちたものであった。利用者に向けられる笑顔や言葉は、作られたものでなく、利用者の方々を尊重・尊敬し、理解しているからこそ向けられる笑顔であり言葉であることに気付かされた。

4階では常に使われ、いつも耳にする言葉がある。その言葉は「ありがとう」という言葉である。スタッフの方々は、利用者の介護をする際には常に心の中に「～して頂く。」という思いがあり、立って頂く・食べて頂く・飲んで頂くなどの介護支援をした際に利用者の方々に「～して頂いて〇〇さん、ありがとう。」と声掛けをする。そして、利用者から「ありがとう」の言葉が返ってくる。返ってくる言葉は、言葉を忘れかけている利用者、声のあまり届かない利用者からも返ることが多々ある。

「ありがとう」という言葉は大切であるという認識はあったが、久々に純粋な人間関係で使われる「ありがとう」を聞いた感じがした。

また、スタッフの方々は、常に利用者の目線に立ち、敬語を使って話しかけておられた。多難な経験を積み重ねた人生の先輩として、子どもを育て上げた親として尊敬の念をもって接している姿には、同じ人間関係を大切にしなければならない教育現場で、私が忘れかけていたものを教えて頂いた。

《3》施設環境（利用者の安全と快適な生活のために）

金沢南ケアセンターは、早い時期より開設した介護施設であるため、最新式の機材や居室を備えた介護施設とは言い難い。しかし、スタッフの方々の努力と工夫によって、利用者の安全確保と快適な暮らしが最大限実現されていた。例えば、ベッドでの生活が慣れない利用者や日常生活がロビーでは馴染めない利用者には、畳コーナーをロビーに即席で設置したり、転倒・転落の危険のある利用者の方々には和室を提供したりと、常に工夫がなされていた。また、自分の居室・ベッドが分るように飾り付けを様々に施したりとスタッフの方々の発想の豊かさには感服した。

どんなに立派な施設であっても、その施設を活用するスタッフの力がなければ利用者の方々に安全で快適な生活を送って頂くことはできない。利用者にとっては最新の設備は必要かもしれないが、それよりも必要なのは日常生活の「普通さ」ではないだろうか。

スタッフの方々は、利用者に常に笑顔でコミュニケーションをとり、外来者（家族等）が来たときも笑顔で必ず挨拶をし、家族には利用者の近況を知らせるなど、できるだけ情報提供と同時にコミュニケーションをとり、家庭的な雰囲気を作り出している。このような環境作りは、お金を掛けてできるものではなく、スタッフの心掛け一で決まる。

現在あるものを最大限生かし、かつ新たに創造することと、そして設備より必要なものが何かと考える大切にするには、学校現場で見習うべきものであると感じた。

《4》利用者のために

私が4階フロアで最初に私だけに与えられた指示は「利用者の横に座りコミュニケーションをとってください」という指示であった。この指示にはさすがに閉口した。

まず、何を話していいのか分からない、利用者の名前も分からない、どのような考えを持っておられるのか分からない、ただ横に座り「こんにちは」という程度。てきぱきと仕事をこなすスタッフの方を横目に情けないと同時に1ヶ月の研修への自信が一挙に失せた。何とかしなければと、日頃率先して憶えようとしな顔と名前、そして各利用者の方々が興味を示すもの等をくまなくメモをして憶えた。1週間程して利用者の方々とも若干ではあるが、会話ができるようになった。いかに一人ひとりを理解し尊重するかということの重大性を再認識した。果たして、私は生徒一人ひとりに対してこの気持ちを持って接していただけるかと考えさせられた。また、利用者の方々は、常に優しい言葉を待ち望んでいる人ばかりではない。一人で居たい時に声を掛けられれば不愉快だと思えるのは誰でも同じである。また馴れ馴れしく声を掛ける事で馬鹿に

されたと思う人もいるであろう。また、話のつじつまが合わず自分ひとりでどんどん話をしたり、物を取られたと訴えたり、何度も同じ事を聞く利用者もいる。そのような時スタッフの方々は、否定せず話を聞き、おおらかに構え、無視せず相槌を打ったり答えたりして利用者を安心させていた。

私自身生徒の声を否定せず、おおらかに構え必ず耳を傾け、答えを出しているだろうか。声以外をキャッチできるアンテナを張り巡らせているだろうかと考えさせられた。また、利用者のためスタッフの方々はできる限り役割を与えていた。下膳、ごみ捨て、おしぼりたたみ、掃除などできるだけ各利用者にあった役割をして頂いていた。忘れることの多い認知症ケアの一環であるそうだ。このことで自己の存在価値を感じやすくし、リハビリの効果もあるそうである。学校でも生徒一人ひとりに自己存在感と価値観を持たせることが重要であることと同じと感じた。

IV 今後の課題

《1》ことば

当たり前なことだが言葉の重要性を感じた研修であった。優しい言葉を表面でなく本質として聞き、利用させてもらったと思っている。

「大丈夫ですか」と聴くと大半の人は「大丈夫です」と答えるそうである。「大丈夫ですか」よりも「何かお手伝いしましょうか」「何かお手伝いできることはありませんか」という言葉・気持ちで接していたスタッフを見て『優しい言葉』をこれから発するよう心掛けたい。

《2》ひと

この研修を通じて強く意識させられたことの一つに人の命を預かっているということである。ちょっとした油断や判断ミスが事故に繋がりそれが寝たきりの状態を作ったり命を奪ったりということにもなりかねない。利用者の安全の確保のため最善の準備と注意・意識・対策については今後学校で生かすべきものと感じた。

同時に、利用者の立場に立ち、きちんと考えや要求に耳を傾けること、自分の役割と居場所があることは、個人を尊重することであり、自己の存在価値を見出すこととなる。生徒一人ひとりに対して自己存在価値が見出せる指導ができるよう生徒の意見や行動を肯定的にとらえて、笑顔で優しく接するよう努力していきたい。

また、面倒だから、早く終わらせたい、次の業務があるということだけで全て自分で処理してしまうことは、自立の意思を奪い、尊厳さえも冒すことになりかねない。授業等でボランティアやバリアフリーなどのことに多く触れてきたが、今後は介護される立場に立った授業を構成したい。

《3》しごと

利用者の方々は様々な訴え・要求をすることがある。このような要求・訴えに対してスタッフの方々はきめ細かい対応をしている。さらに定期的に行う排泄誘導・おむつ交換、入浴、食事、給水、入浴。さらに尿失禁、便失禁、シーツ、衣類交換など数えられないくらいの業務がある。その業務が24時間毎日続く。これらの業務をスタッフは明るく元気に行っている。その姿には仕事に対する自信とプロ意識を垣間見ることができた。間違いがあれば即座に正し、より良いものを追求する姿は素晴らしかった。私より若いスタッフの方が多く中で自分の仕事を振り返り恥ずかしささえ覚えた。学校での私は彼らのようにプロ意識を持っているだろうか。授業、行事、諸活動に対して生徒にどれだけの支援と働きかけをし、それをどう評価して改善したのだろうか。大変に考えさせられた。

—最後に—

1ヶ月間の介護職という研修は私にとって貴重な経験となりました。また、介護職に自信と誇りを持ち働く教え子たちの立派な姿を見ることもでき大変感動しました。最後になりましたが、1ヶ月間指導してくださった職員の皆様、十分にお手伝いをできなかった利用者の皆様に心からお詫びを申し上げますと同時に感謝申し上げます。

また貴重な機会を与えてくださった教育委員会、学校長を初めとする学校職員の皆様にも感謝いたします。